

ただ ざけ
只 酒

み かわ やす き
三 河 安 城

小春日和の穏やかな日曜日夕刻である。
買ったばかりの本を一冊、小脇にかかえ、ひとりの
長身の若い男が、新宿の紀伊國屋書店から出
てきた。紀伊國屋の前は、相変わらず、待ち合わ
せの若い男女がうようよしていき、まっすぐ歩く
のが困難なほどである。

「宮本君じゃない？」

ざわめきの中に、確かに自分の名前を呼ぶ声が
聞こえた。

長身の男は立ち止まり、上半身だけ振り返ると、
ひとりの、やはり若い男が、にこにこしながら歩み寄っ
て来た。見覚えのある顔である。

「やっぱり宮本君だ。」

げっ。佐々木さんけ。

宮本^(註1)と、佐々木^(註2)は高校の同級生で、当時、表面上はそれほど仲は悪くなかったのだが、宮本は、心の中では佐々木を嫌っていた。

「やあ、佐々木君じゃないか。しばらく。」

「いやあ、こんな所で君に会うとは思わなかったよ。俺だって会いたくなかったよ。まったく相変わらずキザな格好しやがって。」

「ほんとに久しぶりだねえ。夏のクラス会は どうして来なかったんだい？」

「そんなこと貴様の知ったことか。貴様の顔をみるのが嫌だったんだよ。」

「ちょっと、バイトが忙しくてね。」

「これから飲みに行くとニなんだけど、よかったら、いっしょに、どう？」

(註1) 東京工業大学 工学部 生産機械工学科 2年 東工大の55コぼれ

(註2) 早稲田大学 理工学部 応用物理学科 3年 やばりお5ニぼれ

佐々木はそう言って、後ろにいる2人の女の子に同意を求めた。そしてまた宮本の方を向いて、

「忙しいのかい？」

「けっ。貴様となんか酒が飲めるか。だいたい、後ろにいる女は何なんだ。片方は、見方によってはまあかわいいと言えないこともないが、目がまんまるで、化粧が濃くて、まるで狸じゃないか。それに、もう片方は救いようのない、どうしようもないブスだ。ブタそのものだ。ツービートじゃないか、“直くな笑うな息するな、ブスが空気を汚染する”というのはこういうのを言うんだらう。

「今日は、ちょっと・・・」

「いや、まてよ。どうして、二いつ、2人も女を連れてるんだ。ははあん。どうせ、合コンか何かで知り合った狸を無理矢理デートに誘ったものの、付き添いとして、狸がブタを連れて来たもんでよわってるんだな。まったく、ダサイ話だ。それで、このブタを俺におしつけてやって寸法だらう。そうはいくか。ようし。」

「よし。せっかく会ったんだ。付き合うか。」

「うん。そうじゃなくっちゃ。ええと、こちらが矢島さんで、こちらが横山さん。」

狸が矢島で、ブタが横山か、まあどちらがどちらだっつていいや。狸は狸で、ブタはブタだ。名前なんてどうだっつていい。

「あ、僕は佐々木君の高校時代の友達で、宮本、よろしく。」

ウオツプ。ブタともろに目が合ってしまった。

かくして、佐々木に率いられて、歌麿使所にあるパブに入った。4人掛けのテーブルに、宮本と佐々木が並んで腰かけ、向かいあって、狸とブタが並んで腰かけた。佐々木がホルカーダをさし出すと、まだほとんど減っていない狸が出て来た。

おっ。まだいっぱい入るとるやんけ。ほほあん、佐々木の野郎、狸と2人で飲みを頼つてもりて、ちよつと前に下見に来て、おのときに入れたといたんだな。見え見えだぜ。よく、

飲みに来るよ。顔えしてよ。まったく、キザな野郎だ。

狸とブタが作ってくれた水割りで、乾杯！ 銀釘と何やらしゃべりながら、佐々木は上着のポケットから、LARKと高そうなライターを取り出し、火をつけた。

「ハえ。いいタバコ吸ってるじゃない。」

「ああ、まあね。君は？ セブンスターか何か？」

「いや、セブンスターはまずい。それに、タバコは、もうやめたんだ。体に悪いからね。まわりの人に嫌な顔をされるのも嫌だし。ほら最近では嫌煙運動が盛んだったり。別にそれに感化されたわけじゃないけど、僕は長生きしたいからね。そろそろ君もやめたらどうだい？」

「そうよ。体によくないわよ。佐々木さんもやめたら？」

狸とブタが口をそろえて同意した。佐々木は、半分位の長さのLARKを灰皿に二割りつけながら、

「どうだ。じゃあ、君も禁煙しようかなあ。」

ふん、軟弱な女め。

「ところで、宮本君、学校の方は忙しいかい？」

おっ、巧みに話をそらしたな。

「いや、それほどでもないよ。だけど、今はクラブの練習の方に熱を入れているから、そっちの方が忙しくてね。君は？」

「まあ、忙しい方がな。でもけっこう楽しくやってるよ。友達と。」

「そうか、いいなあ。僕も早稲田の物理に入っけばよかったかな。けどあと二は狭いな。人多いな。」

「客本さんはどつらな/ごすかま？」

狸が口をはさんだ。

「僕？ 僕は東工大。」

「え？ トウゴウダイ？」

「東京工業大学だよ。」

「はあ・・・」

どうやら知らならしい。まったく馬鹿な女だ。

こういう女を見ていると腹が打って来る。

しらけた馬鹿気になると、さすがに後々末が露骨になる。

「東工大は国立でもレベルの高い方なんだよ。彼は早稲田の物理学科にも受かったけど、東工大に行っちゃった。」

「ああ、そうだよ、学費が安いからね。もういいよ、話題をかえよう。」

狸がまた質問をした。

「さっきクラブの練習って言ってましたけど、何やってらっしゃるんですかあ？」

「剣道」

突然の質問に少しも動じることなく、根も葉もない答えをきっぱり言いかけたことに官本自身、少し驚きを感じた。なぜ剣道を選んだのかは、彼自身にもわからない。とっさに出た答えである。

「へええ、かっこいいですね。」

「これでもまあまあ強いんだよ。秋にあった関東大会でも、結局は、日体大の高木っていう奴に負けちゃったけど、いい所までいったんだ。」

終始、官本はこういう調子でホラを吹き続け、

佐々木をこきおろし、約2時間が過ぎた。

話のネタも切れ去り、そろそろ潮どきかな。

宮本は、今杯目の水割りも、ぐいとあげ、少し大きな動作で腕時計を見て立ち上がった。

「それじゃあ、僕は二の辺で。」

「ええ？ もう帰っちゃうんですかあ？」

狸が驚いた顔をして言う。

「おい、まだいいじゃないか。ゆくりしていけよ。」

佐々木が、形式的に「お世話になります」をする。

「いや、悪いけど、明日（せつ）のレポートがあるんだ。もうそろそろ帰らないと書けなくなるから。」

「ええっ？ 二杯からレポートを書くんですかあ？
大丈夫なんですかあ？」

狸がますます驚いた顔をして言う。

「ああ、大丈夫だよ。このくらい酒が入っていた方が調子が出るんだ。それじゃ、佐々木君、今日はごちそうさん。またうちの方にも遊びに来いよ。その時

は、僕の知ってる店に行こう。僕のおごりだ。じゃ、おやすみ。」

宮本は、上着を肩にひっかけて、カいっほい しっかりした足どりで店を出た。とたんに顔がほころんだ。

やった！ あいつのあの最後のきよとんとした顔が忘れられんぜ。あいつの性格からして、あいつの方から飲みに行こうなんて もう言って来ないだろう。今晚は只酒を飲んだも同然だ。

彼は、にやにやしながら上着を着、ポケットからハイライトを取り出して火をつけ、ネオン街をゆっくりと新宿駅に向かった。

狸から電話があったのはそれから数日後である。

「もしもし、宮本さんでしょうか？」

「はい。どうぞですか。」

「あのお、矢島ですけど・・・ わかりますかあ？」

「え？・・・ ああ、た、佐々木君の・・・」

「佐々木さんに電話番号教えていただいたんです。

・・・ ああ、・・・ちゃんとレポート書けましたかあ？」

「え？ あ、ああ、まあね・・・」

「あのお、二ないた"のことなんで"すけど"・・・あの晩
割勘になりましたえ、佐々木さんが"宮本さんの分、
払うって言ったんで"すけど、あの・・・結局、私が
払ったんで"す。」

「ええっ？」

「それで、・・・あのお・・・今度、暇なときに、
飲み連れて行って いただけませんかあ？」

「え、いや、あの、そりゃ、まあ、いいで"すけど"・・・」

「わあ、よかったあ。・・・あ、それから、あの2人、ま
すます うまくいってるみたいですよ。今晚もデート
みたい。」

「え？」

「佐々木さんと 横山さんですよ、あれ？ 知らな
かったんで"すかあ？ あの2人、できてるんで"すよあ。」